村で

女性：坊や良く見て、どこにいくの！

モデスト：ロリ、ロリ、一緒に来て、急いで、行こう、急いで。

ロリ：モデスト、鐘楼には登ってはだめよ。
　　モデスト、何をするの？　動かないで、馬鹿なことをしないで、落ちるわよ。

モデスト：怖くないよ、僕はときどき登っているのだ。
　　怖くは無いよ、一緒に登ろう、君の手を僕に与えて、手を出して。
　　注意してね、下を見てはだめ。
　　しっかりつかまって、つかまって。　ここに来て、ここに。
　　ねえ、ロリ、君に雲をとってあげたね。僕は君をつかまえた。だから今、僕たちは恋人だね。
　　そうだろう。

ロリ：うそつき！

サロンで

アントニア：然し貴方がた、知らされないでしょう？モデストは調子が良くなかったこと、ドローレスは
　　気の毒だわ、彼女一人で彼の世話が出来なくなったの。今朝、二人は二階に上がったの。

ミゲル：ドローレスも上がったの？然し狂気じみている。自殺行為と同じだ。彼女も二週間のうちに二階の
　　人達と同じように狂ってしまう。なんということだ。

アントニア：貴方はそんなふうに理解しては駄目よ、貴方は愛する人は誰もいなかったからね、ミゲル。

ミゲル：そんなの本当にくだらない、人生はくだらない。

部屋で

ミゲル：何をしてる、ロッケフェレ、ロッケフェレ、何をしているのだ。

エミリ：私は家に帰る、私の物が盗まれるなんて飽き飽きだ。

ミゲル：なに、何を言ってるのだ、今度は何を盗んだと言うのだ。

エミリオ：そうだ、君だ、とぼけるな、君が良く知っている、黒い靴下を盗んだだろう？

ミゲル：黒い靴下、だって？

エミリオ：放せ、放せ、妻の所へ帰る、ここはもう飽き飽きだ。

ミゲル：静かに、エミリオ、聞こえるぞ。

エミリオ：聞こえても、同じだ！私は家に帰る！

ミゲル：ああまずい、看護師だ、静かにエミリオ、お助けを。君、二階に送られるぞ。
　　お早う　サストゥレ　調子はどうだい、良い天気だね。朝一番に運動するのは何より良いね。
　　挨拶をしろよ、ロッケフレ、あいさつを。

エミリオ：放してくれ、ねえ、マヌエル　私は君とは言わないが、誰かが私の物を盗んでいる。それが
　　うんざりだ。だから私は家に帰る。ねえ、君がここにいて時間を費やしているのが分からない。
　　真実、君も家に帰った方がいいよ。私のように。

外で

ミゲル：行くぞ、こっちだ、来いよ。

アントニア：待ってちょうだい、急がないで、ここは急いで歩けない、草むらは歩行器ではうまく歩けないの。

ミゲル：シッー、アントニア声を低く。

アントニア：わかったわ、わかったわ。

ミゲル：ここを歩くには杖の方が良かった、その歩行器はではだめだ。
アントニア：その通り、賢いわ、こんなに暗いと転んで腰を痛めてしまうわ。
ミゲル：君を置いて来ればよかった、私のせいだ。
アントニア：ねえ、私をここに一人置いておいて、二人でその辺りで楽しむなんて。
ミゲル：まあいい、急いで行こう、私達を待っている者がいる。黙って、お願い！
　　ああスエロ、もう少しで心臓に大きな衝撃を与るところだった。
スエロ：シーッ、聞こえるよ、ここから出て、さあ、通ってこい。

ミゲル：これで良い、スエロ、私達は年寄なんだ、なあ。
　　エミリ気を付けろ、頭は大丈夫か。
エミリオ：ああ、大丈夫！
ミゲル：アントニア、ここの有刺鉄線に絡まるな、スエロ、灯りを地面に、地面をよく照らしてあげて。
アントニア：有難う、貴方。
スエロ：どういたしまして、奥さん。
ミゲル：雑草に気を受けて。